

8704 ブルースということばから、最初に・・・

ブルースということばから、最初に思い浮かぶイメージがハードボイルド小説だといったら、唐突に聞こえるだろうか。

ハードボイルドものの主人公というのは、タフで一見非情な行動力とはうらはらに、情にほだされやすい一面を持っている。彼らは生きぬくために、やさしい心根を排して行動しなければならない。そこから、一切の心理描写をたな上げして、ひたすら行動を追いつづける、ハードボイルドの文体が生まれた。人間に対するセンチメンタルな思い入れ、そういった思い入れを許さぬ現実との離反、それはそのまま、ブルースの世界ではないだろうか。

相倉 久人『日本ロック学入門』

[許容訳例]

If I say that the word Blues suggests to me, first of all, the hard-boiled novel, it may sound strange and unexpected.

The hero of the hard-boiled novel is a tough, seemingly unfeeling man of action who, in fact, has a weaker side that is easily touched by emotion. In order to survive he is obliged to act against his tender-heartedness. From this fact the hard-boiled style was born, which puts aside all psychological description and pursues action alone. A sensitive feeling for human beings, and the real world which refuses to accept such sentiment—this contradiction, I would say, is precisely what the Blues is all about.

[翻訳例]

It might seem far-fetched, but the first thing the word “blues” calls to my mind is the hard-boiled novel.

The hero of the hard-boiled story is a man of action whose tough, unemotional exterior belies another, more tenderhearted side. In order to stay alive, he is obliged to put aside this innate gentleness when he goes into action. From this fact arose the “hard-boiled” style, which dispenses entirely with psychological description and concentrates on action. This divorce between a sensitive concern for humanity and a reality that does not permit such preoccupations is, surely, just what the blues is all about.

■ブルースということばから、最初に思い浮かぶイメージがハードボイルド小説だといったら、唐突に聞こえるだろうか。(8704)

★「ブルースということば」は the word “Blues”でも the word blues でも構いません。

★「思い浮かぶ(イメージ)」は、日本人は imagine (e. g. ~ make me imagine)を思いつきませんが、英語では suggest (e. g. ~ suggest to me)を使った方が英語らしくなります。たとえば、What does the word Blues suggest to you? (ブルースという言葉から何を連想しますか) の

ように使います。さらに、associate (e. g. ~ is associated with ~)を使うと、もっと英語的です。たとえば、POD で June を引くと A MONTH associated with roses and midsummer と説明されています。したがって、ここの「イメージ」は association が使えます。

●「連体修飾節＋不定代名詞的体言」(最初に思い浮かぶイメージ)

「最初に思い浮かぶイメージ」はちょっと饒舌な言い方で、「思い浮かぶもの・こと」を「イメージ」というのですから、実質的には「連体修飾節(思い浮かぶ)＋不定代名詞的体言(最初のこと・もの)」です。したがって、英語では「名詞(the first thing)＋関係詞節((that) I associate with ~/ that ~ calls to my mind)」です。なお、calls to my mind の代わりに makes me imagine とか suggests to me を使っても伝えることができます。また、「名詞(the first thing)＋関係詞節((that) I associate with ~)」は associate を名詞化して the first association of ~という言い方に変えることも可能です。

★「ハードボイルド小説」は hard-boiled novels と無冠詞複数にしても間違いではありませんが、これでは具体的になりすぎます。つまり、具体的にいくつかのハードボイルド小説を思い浮かべていることになります。ここでは一つのカテゴリー、つまりジャンルとして述べているわけですから、定冠詞を付けて単数形 the hard-boiled novel にすべきです。

★「・・・だといったら」は、そのまま訳すと If I say that...ですが、仮定法は if...にあるのではなく法助動詞の過去形に含まれるものです。したがって、締め「・・・聞こえるだろうか」の処理と連動します。

★「唐突に」は、辞書には suddenly と abruptly しか出ていません。しかし、ここでは元来の意味の sudden の他に、二つのもの、つまり、「ブルース」と「ハードボイルド小説」の結びつけにかなりの無理がある、といった意味合いもあると思われます。そこで far-fetched を使いたいと思います。この単語の元の意味は「遠くから(無理に)持ってきた」とうことで、「こじつけの・無理した・ありそうもない」といった意味になります。たとえば、far-fetched example のように使うことができます。なお、「ありそうもない」を中心に据えるなら strange and unexpected も可能です。

★「聞こえるだろう」は「(聴覚を通して)思われるだろう」ということですから may sound でしょう。

★「(聞こえる)だろうか」を疑問文で、たとえば、does it sound...?とすると、直接読者に問いかけているということにもなります。どうしても「疑問文」という形にしたいなら Would it sound far-fetched...?とすることも出来ます。ただ、「・・・だろうか」の訳としては、この場合に限らず一般的に、たとえば、I wonder whether it would sound...のようにしないと「・・・だろうか」という日本語のニュアンスは出てこないと思います。あるいは、It might sound (rather) far-fetched to say that...とすると、法助動詞の過去形 might の影響で、不定詞 It(= to say)に条件が加味されて「・・・と言ったら・・・だろうか」となります。

■ハードボイルドものの主人公というのは、タフで一見非情な行動力とはうらはらに、情に

ほだされやすい一面を持っている。(8704)

★「ハードボイルドものの主人公というのは」は、上で述べた通りカテゴリーとしてとらえるのですから the hero of the hard-boiled novel でもいいですが、「ハードボイルドもの」なので the hero of the hard-boiled story としたいです。

★「タフ」は tough でしょう。

● [で] (そして) (タフで)

「タフ [で]」の [で] は「そして」ですから and でつないでも間違いではありませんが、次の「一見非情な行動力」を「一見非情で、行動的」ととらえると、形容詞を三つ並べたことになります。A, B and C と処理することになります。

★「一見非情な」は seemingly unfeeling [unemotional] ですが、seemingly の代わりに apparently でも構いません。

★「行動力」ですが active だけでは、たとえば、He is eighty, but he is still active.のように「よく動き回る・活発な」という意味しか出ません。「行動力のある人」(a man of action)という決まった表現を使った方がいいです。

★「～とはうらはらに」ですが、普通、「逆に」という場合は on the contrary を使います。to the contrary は、たとえば、He have heard nothing to the contrary. (それと反対の [それを否定するような] ことは何も聞いていない) というような場合に使う言い方で、on the contrary (逆に; 反対に; それどころか; かえって) に比べて非常に使い方が狭くなります。もう一つ例をあげると、He gave evidence to the contrary. (彼はそうではないと [反対の] 証言をした) のように使います。まれには His happy smile to the contrary, his heart…のように‘とはうらはらに’の意味で使うこともありますが、これはかなり高度な表現となります。

★「情」は、ここでは無冠詞の feeling か、あるいは emotion です。ただ、the feeling という、何の feeling かということになりますから、ここでは無冠詞です。

★「情にほだされやすい」は be easily touched by emotion ですが、be emotionally susceptible を使ってもいいでしょう。

★「一面を持っている」は have a side ですが、これを使うなら、日本語には現れていない形容詞を比較級で加えて have a weaker side…としたくなります。これは side を使う影響でしょう。なお、weak ではなく weaker にするのは、たとえば、She's tearfully sentimental. (彼女は涙もろい) [常態] と As she got along in years, she became more easily moved to tears. (年とともに、彼女は涙もろくなった) [一時] との違いです。ただ、weak は「意志が弱い・人間的に弱い」というニュアンスがあるので、「心が優しい」という意味の tender-hearted を使った方が、ここでは適していると思います。その場合は more tender-hearted です。ついながら、イギリスの作家 D. H. Laurence は「本源的なやさしさ」を tenderness と言いました。Laymond Chandler の *Farewell, My Lovely* (『さらば愛しき女よ』) や *The Long Goodbye* (『長いお別れ』) の探偵 Philip Marlowe の心根は tenderness のように思われます。

● 「連体修飾節+体言」(情にほだされやすい一面)

「情にほだされやすい一面」は「連体修飾節（情にほだされやすい）＋体言（一面）」ですから、英語では「名詞(a side)＋関係詞節(that is easily touched by emotion)」ですが、sideを使うと a weaker side と日本文の表現に表れていない形容詞を加えたくになります。日本語には形容詞が表面に出ていないので、英語でも表面に出さないで効果を出したいと思います。その方法が次の●です。

●文の構造

「ハードボイルドものの主人公というのは、タフで一見非情な行動力とはうらはらに、情にほだされやすい一面を持っている。」は、言い換えると「ハードボイルド小説の主人公は、タフで一見非情な行動的人間であるが、実は情にほだされやすい一面を持った（行動的）人間である」ということです。つまり、a man of action を先行詞として関係代名詞で結ぶことができます。つまり、The hero of the hard-boiled novel is a tough, seemingly unfeeling man of action who, in fact, has a weaker side that is easily touched by emotion. ですが、「～とはうらはらに」を動詞 belie とか conceal を使うと The hero of the hard-boiled story is a man of action whose tough, unemotional exterior belies [conceals] another, more tender-hearted side. と余計な形容詞を加えないで済みます。belie というのは、辞書では「～を正しく伝えない・～と著しい対照をなす・～に相反する」と出ていますが、たとえば、The report belies him. とか The young face belied the gray hair. のように、「表面だけではわからない・～に反する・～を裏切る」という意味になります。簡単に言うと「外面とはうらはらに内面は・・・だ」という意味になります。これなら weaker は必要ありません。『ランダムハウス英語辞典』では belie のところに His trembling hands belied his calm voice. (落ち着いた声とは裏腹に彼の手は震えていた) という例文・訳文を載せています。この辞書は、初版は英語版の下手な引く写しでひどかったのですが、私がパソコンに入れている版は非常によくなっています。

■彼らは生きぬくために、やさしい心根を排して行動しなければならない。(8704)

★「彼らは生きぬくために」は in order to survive でもいいですが、survive の代わりに stay aliveの方が具体的で「・・・しないと殺されかねない [やられてしまう]」というニュアンスが出ます。

★「やさしい心根」は tender-heartedness でもいいですが、英語では、同一ページに同じ表現を使うことを嫌います。「生まれつき持っているやさしさ」という意味で innate gentleness と言い換えた方がいいでしょう。

● [して] (A して B する)

「～を排して行動する」は、ここでは act against～を使うことができますが、「・・・[して]・・・する」という表現を英語に変える場合、いろいろな訳し方があります。「動作順次」として and を使うことも出来るし、多くの場合「主動詞＋句」で処理できますが、たとえば、「・・・[して (その結果)]・・・になる」の場合は「主動詞＋until・・・」にします。場合によってはどちらに比重があるか注意する必要がある、この「～を排して行動する」は「排する」に比重があると思われます。つまり「行動するに当たっては～を排する」ということ

です。したがって、英語では put aside this [his] innate gentleness when he goes into action となります。

★「・・・しなければならない」は、普通、have to...でいいのですが、ここでは弱い感じがします。ここは「(自分の気持ちとは関係なく) しなければならない」というニュアンスが少し入っていますから be obliged to...を使った方がいいです。

■そこから、一切の心理描写をたな上げして、ひたすら行動を追いつづける、ハードボイルドの文体が生まれた。(8704)

★「そこから、・・・」は、前の文をコロンで終わらせれば form which fact...と続けることができます。つまり、the fact that they are obliged to do this ということになります。

★「一切の心理描写」は all psychological description です。ここも無冠詞にして抽象名詞として使います。descriptions と複数にすると、すでに述べたように具体的な心理描写が頭にあることになります。

★「～をたな上げる」は put aside でいいのですが、すでに使ったので dispense with を使います。これは‘なしで済ます’ということで、たとえば、The rain was very light, so I dispensed with an umbrella.のように使います。なお、dispense with all psychological description の代わりに dispense entirely with psychological description としても構いません。

★「ひたすら行動を追いつづける」は concentrate on action とか pursue action alone でしょう。なお do nothing but pursue action alone でも通じますが、do nothing but...は、ちょっと消極的な感じがします。それに alone があれば、わざわざ do nothing but は使う必要はありません。

★「ハードボイルドの文体が生まれた」は the “hard-boiled” style was born [arose]でしょう。ダブルクォーツは「いわゆる」の感じです。

●文構造

「そこから、一切の心理描写をたな上げして、ひたすら行動を追いつづける、ハードボイルドの文体が生まれた。」の文は「そこからハードボイルドの文体が生まれた」が主張の本体で、「一切の・・・」は「ハードボイルドの文体」を追加説明する連体修飾節です。したがって、英語的には「名詞(the “hard-boiled” style)+関係詞節(which dispenses with all psychological description and concentrates on action)」としなければなりません。それで、主張の本体「そこからハードボイルドの文体が生まれた」を From the fact was born [arose] the “hard-boiled” style と倒置して関係詞節(, which dispenses with all psychological description and concentrates on action)を続けると英語らしい文になります。

■人間に対するセンチメンタルな思い入れ、そういった思い入れを許さぬ現実との離反、それはそのまま、ブルースの世界ではないだろうか。(8704)

★「人間に対する」は for human beings とか for humanity でしょう。

★「センチメンタルな」ですが、sentimental という言葉は、現在ではいわゆる‘お涙頂戴的な’という安っぽい感じになっています。ここは‘人間に対して心情的に感じやすい・敏感に

反応しやすい」ということでしょうから sensitive がいいと思います。

★「思い入れ」は辞書には contemplation（沈思黙考）とか attachment（傾倒・愛着）がでていますが、ここでは「心配り」(concern)とか、もっと簡単に言うと「気持ち」(feeling)とかにしないと、‘ハードボイルド’に似合いません。

★「そういった思い入れを許さぬ」は、上のような解釈から「そういった心配り・感情を許さない」という言い換えることが出来るので refuse to accept such sentiment あるいは does not permit such preoccupations でしょう。

★「現実」は the real world でもいいですが、ここでは「ハードボイルド小説」を hard-boiled novels としないで the hard-boiled novel と「定冠詞+単数形」にして抽象的にとらえているので、いくらか抽象的に a reality（一つの現実）としたいです。

★「離反」ですが、この「A と B との（間の）離反」とは‘根本的[基本的に] 矛盾している、相容れない衝突・対立・闘争」と考えると、「離反」は「矛盾」(contradiction)とか、「相剋」(conflict)とかに言い換えてもいいのではないかと思います。つまり、underlying conflict between A and B ですが、conflict の代わりに gap を使ってもいでしょう。また、「離反」という元の意味に近い言葉としては divorce を使うことが出来ます。たとえば, this divorce between A and B です。

★「それは」とは、「この離反」(the divorce between A and B…)とか「この矛盾」(this contradiction)と言い換えることが出来ますし、全体を「そのような思い込み」(such preoccupation)と言い換えることも出来ます。

★「そのまま」は precisely とか just で表すことが出来ます。

★「ブルースの世界」は難しい。日本語では「～の世界」という言い方をよくしますが、たとえば、この「それはブルースの世界」を This divorce is the world of blues とは言えません。ナンセンスです。つまり、英語の to be [is]という動詞の使い方はかなり厳密で、簡単に二つのものを結びつけるわけにはいかないのです。こういう場合、よく英語では That's (precisely) what something is all about という表現を使います。つまり、「～こそ～の言わんとしているものだ・本質だ」ということになります。

★「ではないだろうか」は I would say…でもいいし、ここでは surely を挿入的に使うことでも表現することが出来ます。

●「連体修飾節+体言」(そういった思い入れを許さぬ現実)

「そういった思い入れを許さぬ現実」は「連体修飾節(そういった思い入れを許さぬ)+体言(現実)」ですから、英語では「名詞(a reality/the real world)+関係詞節(that does not permit such preoccupations/ which refuses to accept such sentiment)」です。

●文の構造

「人間に対するセンチメンタルな思い入れ、そういった思い入れを許さぬ現実との離反、それはそのまま、ブルースの世界ではないだろうか。」は、簡単にすると「A(人間に対するセンチメンタルな思い入れ)とB(そういった思い入れを許さぬ現実)との離反が・・・で

はないだろうか」ですから This divorce between A and B is…)と処理します.